

志賀・明正寺 改宗前の遺物出土

志賀町百浦、真宗大谷派明正寺の境内から、真言宗の供養塔で室町時代後期のものとみられる五輪塔や板碑が約七十基出土した。近隣ではまれな数であり、中には素人が彫ったとみられる稚拙な板碑も混じっていた。三日、同寺で営まれた法要では、藤井恵隆住職や門徒らが手を合わせ、地中から姿を現した多数の石は、はるか四五十年前に存在した素朴で篤い信仰の風景を現代に映し出している。

同寺は安土桃山時代にあたる一五八〇(天正八)年、真言宗から真宗に転じたとの記述が「羽咋郡誌」にある。見つかったのは境内隅の傾斜地で、これまでも五輪塔の一部や板碑などが現れていた。整備するために高浜町の造園業で日本庭園協会石川支部副支部長を務める泉真人さんが掘り起こしを進めたところ、現れた遺物は板碑が三十三基、五輪塔が十八基、石仏が十三基など合わせて約七十基にもなった。専門家の鑑定で地元のほか、若狭地方から運ばれた石もあった。

建立された年代を示すものはなかったが、元同町文化財保護審議委員の岡部修さんが詳しく調べ

五輪塔、板碑70基

篤い信仰を示す

室町期、素朴な作りも



境内の一角から出土し整備された五輪塔や板碑に手を合わす藤井恵隆住職や門徒ら
—志賀町百浦

門徒ら法要

たところ、板碑に描かれた五輪塔の様式や梵字の彫り方などから四五十年ほど前の室町後期のものと判断された。板碑の中に彫られた五

輪塔などの姿がゆがんでいる点に注目する泉さんは、素人くささの中に「信心の篤い人が地元の見よう見まねで彫ったのではないだろうか」と話した。

と推測。岡部さんは「昔から信心深い人が多かった証であり、長い時を超えてきれいにされて仏恩の深さを感じる」と感慨深げに話した。

加能民俗の会の西山郷史副会長(宗教民俗) 〓 珠洲市によると、中世の能登は山岳信仰の石動山に代表されるように全国的に見ても密教が盛んで、各地に密教系寺院があった。しかし、戦国期の激動で密教勢力の多くは衰退し、新しい宗教で

ある真宗に取って代わられた。明正寺で見つかった五輪塔もこの際、過去の遺物として処分されたものとみることができ、密教系の宗教者が記念碑的に残した可能性もあるという。

西山副会長は「供養塔などが七十基も出てくるのは相当なことだ。明正寺のある旧志賀町の北部は現在、真宗寺院が多いが、真宗が入ってくる以前は真言系など密教勢力の非常に強いエリアだったことを示す物証となる」と話した。